

【コラム】

学び続けるということ ―経験を通して―

人見 麗子

To Keep Learning ; Through My Experience

HITOMI, Reiko

何事によらず、継続することは至極困難なことである。理由は、人間はいつも快適な状態で生きていられるわけではないからである。古くから「継続は力なり」といわれているがどこからそのようなことが言われるようになったのか考えることから始めた。

元大分県知事・平松守彦氏の父親平松折次（1880～1968）の言葉と伝えられている。平松家の家訓でもあり 1924 年同氏が開設した夜間中学校の校訓であったとも言われ、大分市の府内城跡公園近くの松栄神社の前に「継続は力」の石碑と碑文が残されている。

石碑は、平松折次の教え子たち（継続の会）が建立したものとされている。碑文の中で、評論家の草柳大蔵氏（1924～2002）が「継続は力なり」の言葉の創始者は、「平松氏だと信じるしかない。」と述べている¹。

明治時代の宗教家住岡夜晃（やこう）（1895～1949）の著書『讃嘆の詩』上巻に「念願は人格を決定す。継続は力なり」という記述がある²。その他、同様の文は、住岡夜晃 法語 『讃嘆の詩』の見開き裏面に掲載³。

資料より、「継続」の重要性が言われ始めたのは、古いことではないことがわかった。

私が生涯学び続けるきっかけになったのは、母親の言葉「人間死ぬまで勉強」である。学習や教育には適時性があるから、「今が大事」である。チャンスを逃さないことかもしれない。「何事も始めたことは中断せずに続けること」は母の考えであった。

人生は選択と決断の連続であり、専門学校卒業と共に学びの遍歴が始まった。

サラリーマンには必ず定年が来る。それも突然くるわけではない。私は 57 歳の定年を契機に第二の人生を考える必要があった。幸運にも日本唯一のオープン・ユニバーシティが、定年 4 年前に開学、このことは、退職後学び続けることができるチャンスとなった。

在職中の学びは、より良い仕事をするためのものであり、仕事の一環として捉えることができる。その意味では自主的というより必要に応じての学びであった。

堅牢な建築には基礎工事をしっかりとすることが重要である。と同様に学問の分野でも同じことが言える。専門分野を深めるためにも幅広い知識が必要である。「専門馬鹿」にならないようにすることであろう。

在職中に放送大学 1 回生として入学した。教養学部しかないので広く知識を修得するに

は好都合である。仕事をしながら、専攻科目の規定の単位を修得すること（単位認定試験合格や面接授業による単位取得等）が卒業条件となる。仕事に支障をきたさないことは当然のことで、結果的に大学の学びは不十分にならざるを得なかった。しかし、多様な視点があることや未知の学問探求の面白さと同時に疑問を持つことにより学びが深まり、学びがより楽しいものであることに気がついた。

当時東京に在住し定年を迎えたのであるが、社会教育といわれている時代であり、生涯学習に移行する前の段階であった。大学の研究生として身をおくことになり、東京都 23 区の社会教育行政のあり方の相違に興味を持ち、その違いを調べることから始めた。社会教育担当者に意見を聞いたりアンケートを実施したりした。自治体を訪問することにより、各地区の特性や状況が把握できた。また、社会教育にかかわる法人を設置しているところと行政だけで社会教育を実施しているところの経費や事業面に着目したのが研究の始まりとなった。卒業論文はハビガーストの理論を援用した発達課題であったので文献研究にとどまった。従ってフィールドに出ての研究は初めての経験となったが、地域の文化を学びつつ進める研究は興味深いものであった。

一方指導教師と共に長野県佐久地方圏域（いわゆる農村地域）に足を踏み入れ、都会育ちの私にとって目新しいことが山積していた。村落の過疎化、伝統芸能の存続やその後継者問題と共に農業の後継者問題も課題であった。公民館や役場の機能など未経験のことが多くあった。このような中で指導教師の研究手法、態度、学会発表など身近に学べることは得がたい経験となった。

2 年間で、故郷の京都に帰り、知識の乏しさを痛感したので、教授のアドバイスもあり京都大学の聴講生に出願、受験し聴講を認められて 10 単位の知識面の土台の修正ができた。また、農耕文化振興会に所属、その研究会に参加し、農業にかかわる知識の修得に努めた。主として、東南アジア（ミャンマー、カンボジア、タイ、インドネシア、スリランカ、ベトナム、ラオス、ブータン、シンガポール、マレー半島及びボルネオ、中国（昆明）、台湾、メコン川下り（景洪～チュンセン、カンボジア～ベトナム）マダガスカルなど農業視察フィールドワークにも参加し野生稲や浮稲、トラジャ族の住居、サゴ椰子からの澱粉抽出方法、などととも種まき、収穫方法、農機具（穂刈り用具）やバガン遺跡から眺めた満点の星空の美しさや地域の人々との触れ合いを通してさまざまな地域文化を知ることが「百聞一見に如かず」の通り多くの学びを得た。特に印象的であったのは、イバン族のロングハウスにホームステイした時キリスト教に改宗したイバン族にアミニズム信仰が残り、入村時（ロングハウスが 1 村単位）の儀式は（豚の生け贄、鶏回しなど）得難いものであった。また、フィールドワークの参加者は大学の教授（社会学、農学や美術）、研究者（鳥類、蝶類や織物）、高校教師、農業従事者、米屋、農業や農作物に興味を持つ主婦など多彩な構成で、好奇心や探究心の持ち主ぞろいであればこそ続けられた活動であり、多方面にわたる知識や知恵を吸収することもできた⁴。

これらのフィールドワークと並行して、放送大学の学生も存続し、大阪教育大学の修士課程で「生涯教育組織論」を専攻した。膨大な研究資料を集めながらも、修士 2 年夏、腰椎骨折で 1 ヶ月入院することになり、論文はあきらめかけた。しかし、年齢を考えると再

起不能かと思うようになり、最終提出日に賭けることにした。当初の研究計画を大幅に縮小し、皆様のご支援で何とか修了でき大きな喜びを味わった。その後、放送大学は結果的に 6 コース卒業し、現在は選科履修生として興味ある科目を学んでいる。

京都大学での学びは、教育学部生涯教育院生ゼミにチューターボランティアとして参加させていただき、学生の研究態度・学習や教師のかかわり方を学び、私自身の研究も発表させていただく機会を得た。また、2006 年 3 月廃校予定の南山城村野殿童仙房小学校を先生方と訪問、地域役員と交流。京都大学大学院教育学研究会と地域の生涯学習推進委員会と協定書が交わされ、調印式が同校で行われた。このときを契機として、小学校がこの地域の生涯学習の拠点として活用されることとなった。主としてゼミ生とともに参加し、防災、自然観察、祭礼など地域の人々とともに考える機会ができた。広報誌『風と雲の便り』も京都大学大学院教育学研究科が「地域の人々に活動の概要を知っていただく」ことを目的として発行されている。この地域は、京都府で唯一の村であり、野殿と童仙房があり、野殿は柳生藩家老職野殿氏が代々居住、一方、童仙房は 1868 年（明治元年）の開拓村に端を発している。京都府に開拓村があることは知らず、目から鱗の体験となった。標高 500 メートル、夜明けの雲海の美しさ、山林、川、不動の滝などの自然美とともに茶畑や、稲作などの点在は一幅の絵のようである。地域の皆さんと共にさまざまなイベント（広報誌『風と雲の便り』参照）をするうちに住民の積極性も見られるようになり、「広場」と名付けて 1 ヶ月 2 回、計画を立てさまざまな行事を実施されるようになった。この地域とかわり始めて 10 年になろうとしている。伝統的村野殿と開拓村童仙房の違いは、文献や書物では学ぶことができない体験による知識、いわゆる知恵の修得は得がたいものとなった。特に「みんぐ無量館」を訪ねて川下長久氏（民具収集家）の好奇心と創造力、無私の実践力に 70 余年の生活史を感じた。当時今山区長柴垣治男氏とも出会い「歴史を学び未来を見つめ今を生きる」という言葉も印象に残っている。（広報誌 vol.19）

多くの学びを社会還元するように言われ非常勤講師（80 歳で退職）、ボランティア活動（点訳、平安京解説や精神障害者デイケア）をしているが、この分野にも学びは必要となり基礎はやはり「学ぶ」事であることを痛感しつつ、楽しみながら友人共々学び乍ら活動をしている。

82 年の人生で、学校教育以外の学びは、自分で選び学び続けていたことになる。老人の三大骨折も体験し入院、通院、四肢に障害を持ちつつ、母親の介護、見取りも人並みに行った。必死に勉強一筋でもなく、心にゆとりもあり旅行も大いに楽しみつつ学び続けることができた。孤独な学びや友との学び、意識しない学びも多く楽しい人生になろうとしている。

振り返ると明治時代生まれの母親の一言が、私の人生を左右することになった。人の話す言葉や書かれた言葉は、それを聴いた者、見た者には大きな影響を与えることを痛感した。

私の人生訓は『論語』から学び、雍也第六「之れを知る者は之れを好む者に如かず。之れを好む者は之れを楽しむ者に如かず。」である。仕事、勉強、人生など何事も「楽しく」できることで、「継続して学ぶ」ことが可能になったと思う。学びを続けるには、周囲の

人々の支援は勿論であるが、興味を持ち、楽しくすることにより「続けること」ができると考えている。

¹ <http://ameblo.jp/tutiya62/entry-11620784944.html> (2015 年 12 月 11 日最終閲覧)

² 住岡夜晃『讃嘆の詩』上巻、樹心社、2003 年、p.60

³ 『真宗光明団創立 70 周年記念誌』（非売品）、真宗光明団発行、1987 年

⁴ 拙稿『アジアをゆく』アジア太平洋農耕文化の会、2010 年発行、pp.92-96